

編集後記

2008年に開催された「先住民族サミット」アイヌモシリを継承して、本学がイニシアティブをとって「先住民族サミット in あいち 2010」を開催できたことは、本文で述べられたように、さまざまな意義があった。本号の目的はその意義を記録として残すことである。

地方の公立大学の能力の限界を超えるような大きな企画を実現できたのは、WIN-AINUとの共同、朝日新聞社、総合地球環境学研究所をはじめとする多くの機関との連携、また多くの方々のご協力の賜物であった。本号にはそうした多くの人々の力の結集の記録も目的としている。

編集作業はなかなか進まず、3月に現地調査に赴いたブータンにまで持ち込むことになってしまった。その最中、日本で大震災が発生した。数日たって、テレビの衛星放送を見ると、すさまじい津波による容赦のない破壊と犠牲、被災した方々の苦しみ、さらに、とりかえしのつかない愚かな過ちの結果である原発破壊と深刻な放射能漏れが、繰り返し放映されている。日本全体が破滅に直面しているかのようである。

ブータンの人々から気遣いの言葉をかけられ、メールで世界の友人から安否を問われる。3月19日、パロのゾン（寺院と行政府を兼ねる城）の大タンカ（仏画）開帳があったので、参詣した。僧侶による法要と仮面舞踊が、日本の震災への追悼として執り行われた。

「GNPよりGNH(国民総幸福量)」を国の政策として掲げ、実践してきたブータンから日本を見ると、近代化を優先し、便利さと物質的豊かさばかりを追い求めてきた日本の来た道が誤りであったと、改めて実感させられる。先住民族サミットで語られたことが、今まさに強烈な現実感を帯びて訴えかける。近代化がもつリスクと脆弱さを再認識し、立ち止まって、国と社会の針路を熟慮・再考すべきときであろう。自然災害は自然現象によって引き起こされるが、その被害の大きさと特徴は社会文化と関わっていることを前号でも論じた。自然との共生・持続的な社会の確立と、自然災害に対応する知恵は根本でつながっている。ペルーの古代文明の例のように、「先住民族的」文化にはそうした知恵と価値観が埋め込まれている。今後は、そうした側面に焦点を当てながら「先住民族サミット」の理念・実践を継承していくことが重要だと改めて思う。

稲村哲也（3月20日、ティンブーにて）

共生の文化研究 5 Journal of Cultural Symbiosis Research No.5

2011年3月31日発行

編集・発行 愛知県立大学 多文化共生研究所

住所 〒480-1198 愛知県愛知郡長久手町大字熊張字茨ヶ廻間 1522-3

代表 稲村哲也 (INAMURA Tetsuya)

E-mail: inamura@for.aichi-pu.ac.jp

印刷 株式会社 シイエム・シイ

Aichi Prefectural University CSRI (Cultural Symbiosis Research Institute)

〒480-1198 Nagakute-cho, Aichi-gun, Aichi-ken, Japan
